

シンポジウム記録 震災被災地の水産業と漁村の復興

増養殖の被災状況と復興

佐藤秀一<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>日本水産学会水産増殖懇話会委員会, <sup>2</sup>東京海洋大学

Damage situation and reconstruction  
in aquaculture sector  
SHUICHI SATOH<sup>1,2</sup>

<sup>1</sup>Steering Committee for the Colloquium on Aquaculture, <sup>2</sup>Tokyo University of Marine Science and Technology, Minato, Tokyo 108-8477, Japan

3月11日に起こった東日本大震災によって、東北地方の太平洋岸で営んでいた水産増養殖業は未曾有の被害を被った。東北地方の太平洋岸は、ワカメ、コンブ、ホタテ、カキ、ギンザケ等の主要な生産地である。それが地震によって発生した巨大な津波によって、ほぼ壊滅状態となってしまった。ここでは主な養殖対象種について、その被災状況と復興を紹介する。

ワカメ養殖では、本格的な収穫前に震災に遭ってしまったので、本年度の生産は例年との2割程度に留まった。震災で養殖施設が大きな被害を受けたが、岩手県では、場所にもよるが4割程度の施設が再開予定であると報告されている。宮城県においても、気仙沼をはじめ種付け作業が行われた。宮城県では来年度の生産量は7,000トンと予想されている。

ノリ養殖では漁期の終盤であったため、例年の6割程度の収穫であった。ワカメ同様に多大な被害を受けたが、宮城県では、種苗となる糸状体の大半を有明海等の業者から入手するため、確保には問題がないが、石巻湾の養殖ノリの種付け量は例年の4割程度と報告されている。

マガキ養殖では、津波により今秋の成貝出荷はほぼ壊滅的な被害を受けた。特に宮城県では成貝の出荷だけではなく、全国の80%以上の種苗を供給してきた。このため、種苗の供給に支障をきたすものと思われる。宮城県では親貝の生存を確認しているが、種苗の確保は非常に難しい状況にある。稚貝の移植は感染症の発生などが懸念されるため、産官学の連携によって、宮城県で回収した稚貝を母貝とする人工種苗生産を開始している。これらの人工種苗を特定の海域に垂下し、来年・再来年の

産卵母貝群となり、天然採苗の復興を目指した取り組みを行っている。

ギンザケ養殖については、ほとんどの生簀が津波により流され、海面生簀で飼育していた魚は流出した。流出したギンザケはその後、三陸沖に留まり成長し、再構築された定置網にて、採捕されているものが多数ある。また、中には近隣の川に遡上した個体も発見されている。これらの個体により、既存種への影響も懸念される。ギンザケ養殖の復興であるが、稚魚が陸上施設で成長しており、それらを無駄にしないためにも、再び宮城県の漁協においてギンザケ養殖を復興する動きが出ている。これによる来年度の生産量は7,000トンと予想しており、震災前の生産量には至らないが復興状況としては望ましいと思われる。また、山陰地方に試験的に移設する試みもある。

福島第1原発の事故による放射能汚染の水産養殖に及ぼす影響であるが、いままでのところ、淡水養殖では、検出されたものがあるが、その量は暫定規制値を大きく下回るものがほとんどで、規制値を上回るものは1検体のみであった。一方、海水養殖魚からはいまのところ、全く検出されていない。

このような状況を鑑み、東日本大震災による水産増養殖への被災の概要、そして主な増養殖対象種についての復旧・復興状況に関する情報を共有することを目的として、水産増殖懇話会では、平成24年1月28日に「東日本大震災からの水産増養殖における復旧・復興」と題する講演会を東京で開催する予定である。

講演題目は以下のように予定している。

1. 東日本大震災による水産増養殖への被害の概要
2. 関東以西における水産増養殖への影響
3. 海藻類増養殖における復旧・復興状況
4. 貝類増養殖における復旧・復興状況
5. 魚類増養殖における復旧・復興状況
6. 内水面における復旧・復興状況
7. 総合討論

今後、水産増殖懇話会としては講演会や委員会を通して、増養殖における復旧・復興に関連する情報を共有し、学会員に発信するばかりでなく、少しでも早く復興するようお手伝いしていく予定である。